発行所　社会福祉法人全国社会福祉協議会　昭和52年11月12日第三種郵便物認可

ボランティア・市民活動のコーディネーター・リーダー等推進者のための

ボランティア情報

【volunteer_information】

2012 NOV. 11
VOL.426
平成24年11月1日発行 毎月1回1日発行

平田第二仮住宅サロンでの野点（のだて）

特集

今、ボランティアを問う

～変えていくべきこと、変えてはいけないこと～

02

Contents

ホントは身近なボランティア
新潟県長岡市四郎丸地区 …… 06

突撃訪問！
隣のコーディネーター
（介護アロマコーディネーター）

帰ってきた！
あるある質問コーナー …… 07

保険の広場
つながって広げ続けよう！
事務局だより …… 08

岩手県釜石市（いわてけんかまいししし）

今月の鼓動

岩手県釜石市
「岩手県立釜石商工高等学校」

高校生の私たちにもなにかできることを手伝いたい

「自分たち自身も被災したけど、まわりの人も大変だ、なにか少しでも役に立つことをしたい」との思いで、震災直後からボランティア活動に参加していた生徒たち。

学校の課題研究の授業で「復興ボランティア」を選択し、まずは地元の人がどんなことに困っているか知ろうと、商店街でアンケートをとりました。しかしなかなか困りごとを聞き出すことは難しかったとのこと。

その後いろいろな取り組みをためしながら、今ではNPOや社協と連携し、仮設住宅でのお点前（てまえ）サロンを始めています。

まだまだ緊張感があり、なかなかうちとけることが難しいと言いながらも、「会を通じて困っていることをみつけだし、自分たちになにかできることをしたいです」と、初々しくも力強く答えてくれました。

●取材日／2012年11月5日

岩手県釜石市
「釜石商工高等学校」
http://www2.iwate-ed.jp/kat-h/

東日本大震災では学校の建物にはほとんど被害がなかったものの、生徒や保護者の方々に甚大な被害が発生した。学校として、生徒や保護者の方々へ最大限の支援を行いながら、学校生活を安定・充実させ学校教育の復興に向けて歩んでいる。
今回の記事は3年生の課題研究で「ボランティア」の校外活動を選択した生徒達のとりくみについて取材したもの。

全国社会福祉協議会

特集

第21回
全国ボランティアフェスティバルみえ
分科会24レポート

今、ボランティアを問う

～変えていくべきこと、変えてはいけないこと～

＜出演者＞
（コーディネーター）上野谷加代子氏
（課題提起者）原田　正樹氏
（パネラー）長谷部　治氏
水谷　綾氏
村上　徹也氏

去る9月29日、30日両日に行われた第21回全国ボランティアフェスティバルみえにおいて「広がれボランティアの輪」連絡会議による分科会が開かれました。東日本大震災の被災地支援には数多くのボランティアが参加されました。厳しい日本の社会福祉において、ボランティアやNPO等の市民活動、企業の社会貢献活動、コミュニティビジネスなどが広がり、さまざまな社会的な問題の解決に貢献しています。今、ボランティアの原則として掲げられていた、主体性、無償性、社会性等について、その境界にある活動が広がってきており、ボランティアの概念にもゆれが生じている。こうした状況をふまえ、改めてボランティアとは何かを考え、「変えていくべきこと、変えてはいけないこと」について考えました。

同志社大学教授
「広がれボランティアの輪」連絡会議副会長
上野谷（うえのや）　加代子（かよこ）さん

この20年のボランティアを取り巻く政策・制度と価値の変遷

日本福祉大学学長補佐
「広がれボランティアの輪」連絡会議幹事
原田（はらだ）　正樹（まさき）さん

施策上の位置づけの拡大と変質

ボランティアを取り巻くこの20年間を振り返りますと、社会福祉分野においては、さまざまな促進施策が展開され、いくつもの制度改正に伴って、ボランティアの位置づけが拡大されてきました。また、ＮＰＯ関係の法制も整備され、最近では、「新しい公共」の諸政策の中で重要な構成員として位置づけられるなど、今やボランティア・市民活動は社会の一翼を担うものとして着実に浸透してきたと言えます。

その中で気がかりな動きもあります。従来、ボランティアは「主体性」を大事にしてきました。戦前は「滅私奉公」の考えや、国家の指導による「勤労奉仕」が戦争と結びついていた歴史があります。戦後はその反省から、「ボランティア」の自主的な行為としての側面、民主主義と平和を実現していくための市民社会の担い手としての側面が重視されてきました。

しかし今日、さまざまな施策でボランティアが位置づけられるなかで、「ボランティア活動の義務化」や「県民総ボランティア構想」といった動き、国民保護計画での武力攻撃事態等における位置づけ、軽犯罪者等への社会奉仕命令、介護分野でのボランティア活動のポイント制度の導入などが議論されています。

ボランティアが浸透してきたことと同時に、ボランティアが安易に国家や制度のなかに組み込まれています。こうした流れのなかで、ボランティアコーディネーターの役割は、コーディネートの知識や技術よりも、その思想や価値を問うものであってほしいと思います。

何をめざす協働なのかを問う

近年、良く使われる言葉である「協働」には2種類あることに注意することが必要です。一つは行政が住民を政策決定過程に参加させて、事業を合理的に遂行するための「協働」であり、もう一つは、地域住民が主体的に行政施策の決定過程に参画する、プロセスを重視した対等型の「協働」です。

今の時代はどちらも必要なシーンがありますが、言葉は同じ「協働」でも立ち位置は違うものになります。どういう思想で何を目指す協働なのかを常に問うことが必要だと思います。

そして、こうした協働を通じてどのような地域社会を創造していくか、地域の自治をどのような役割から進めるのかを、ボランティアの視点から問い直していくことが必要であり、それがこれからの新しいボランティアを考えることにつながると思います。

サポーターの声

共同募金運動が始まり、街頭募金活動に協力してくださっている地域の方々がいます。共同募金運動に協力するボランティアってあまり注目されることはないけど、募金活動というボランティアをする人たちって、改めてすごい人たちだなと、この時期になるといつも実感します。（北海道　安田さん）

「主体性」・「無償性」「社会性」の境界線とは

神戸市社会福祉協議会
長谷部 治（はせべ おさむ）さん

あいまい化しつつある境界線

従来、ボランティアは「主体性」、「無償性」、「社会性」のすべてが「ある」ことが当たり前とされてきましたが、東日本大震災以降、どのような状況になっているかをお話しします。

まず、「主体性」ですが、言われなくてもやることが本質です。しかし今回、災害ボランティアセンターの現場では、言われたことだけをするために来たボランティアが一定数いたことが印象に残っています。そうした割り振られた仕事だけをするという感覚が主体性を削いで行っている状況があると思います。

次に「無償性」ですが、基本は「自己完結」で、これは「他の人に迷惑をかけませんよ」という意味を含んでいます。「保険代は社協持ち」という人もいます。また、「高速代免除」を受ける人もいます。制度化されているものなので否定するものではありませんが、これはもともと災害復旧の専門家のための仕組みですし、実は免除の手続きが現地の負担になっている側面もあります。今回の震災では、多くの企業の方がボランティアとして活動しました。会社から給料をもらっている人は「有償」ですが、企業自体は儲からないのに現地に人を派遣している。これも境界線はどこなのか。

三つ目が「社会性」です。これも、「依頼者が頼んだ内容に基づいて活動する」、「きっとこういうことが困っているだろうと想像して活動する」、「自分のできることをする」、「自分のしたいことする」といくつかのタイプがあります。これらの境界線はなかなかパシッと切れるものではありません。

活動の先にある人の生活に視線を送る

東日本大震災での経験を踏まえて3つほどお伝えしておきたいことがあります。

一つは、困った状態がある「ニーズ」が沢山あっても、次の段階である「ウォンツ」と呼ばれる「私を助けて」といえる状況にならないとコーディネートできないことです。このことがあまり知られていない。

被災者の方が地震の発生直後に、避難所に避難していて、まだ余震が頻発して不安な中に、「家の片づけをしますよ」、と言っても、被災者は頼める状態ではありません。

もう一つは、「ボランティアを派遣する」という言葉が良く使われていることです。「派遣」は人に命令してやらせることなので、ボランティアに活動を「紹介」することはあっても、「派遣」はおかしい。

最後は、常に相手がある活動であることを忘れてはいけないということです。ガレキにしか見えないものでも、暮らしていた方にはかけがえのないものであることがある。泥かきの先にある人の生活にきちんと視線を送らないと間違ってしまう、といつも伝えています。

もっと巻き込む仕掛けづくりを

大阪ボランティア協会事務局長
「広がれボランティアの輪」連絡会議幹事
水谷 綾（みずたに あや）さん

自由でしなやかなボランティアの価値を伝える

ボランティアの原点とは何かと考えると、それは社会とどのような関係性をつくるのかに尽きると思います。ボランティア活動とは、「ほっとけない、やりたい」という思いと、“私”にできること、そして、地域や社会が求めていることの三者が合致するところにあるものだと思います。

東日本大震災で本当にボランティアマインドは高まったのか、あのときの湧き上がるような衝動は果たして真の「主体性」だったのか、マスコミが流したことだけが「ニーズ」だと思っていなかったか、「保険やバスなどのインフラは社会が用意して当然」といった風潮をどう考えるか、といったことは改めて総括していく必要があるのではないかと思います。

今の日本の社会は人口やGDPが減少し続けていく、歴史上未経験の時代を迎え、どんどん社会が縮小していくことへの不安感を抱えながら日々の営みを紡いでいます。そのようななか、物事が非常に管理的になってきていることに危機感を持つ部分があります。

行政との関係で見ると、まず非常に短期間での成果が問われるようになっているように見受けられますが、ボランティアのリーダーを育てるのに2～3年はかかります。人やつながりを育てていくのには、じっくり寄り添うことが求められます。それが単年度とか、非常に短期に結果を求められるのは非常につらい。

また、中身とか質がどうあれ、数が伸びたのか、施策としての成功を数値で見せられるのか、という定量的な面だけを問われるところに難しさを感じます。ボランティアとはもっと自由でしなやかなものであり、短期間に数値で表される成果とは異なる価値があることをうまく伝えていかなければなりません。

もっと巻き込む仕掛けが必要

今の若い世代を見てて、公共的・社会的なことへの関心が非常に高まっていると感じています。一つにはそうしたことが、「かっこ良いこと」とする風潮にもあると思います。また、自分が気軽にやれる範囲で留まろうとする傾向があります。活動でつながったことからさらに深めていこうという志向性が弱くなってきているのかもしれません。逆に言えば、課題に触れるというのは、さらに関わりを深める大きなチャンスであるはずなので、私たちがその機会を十分に生かせているのかが問われていると思います。そのため、私たち自身が貪欲に巻き込む力を醸成していく必要があるのでしょう。

書籍紹介
『ミーティング・ファシリテーション入門　市民の会議術』青木将幸 著（ハンズオン！埼玉出版部）
■2012年11月発行　■定価2,100円（税込）　購入希望はこちら　http://www.hands-on-s.org/blog/2012/10/post_70.html

市民活動が生み出す価値を検証し、伝えていくことが必要

市民社会コンサルタント/
元・「ボランティア国際年+10」
推進委員会
・提言プロジェクトチームメンバー
村上 徹也さん

ボランティアならではの価値を伝える

被災地に訪れる多くのボランティアは、単発で短期間活動する「エピソディック」なボランティアです。東日本大震災では、多くのNPO/NGOが活動し、今日に至るまで継続的な関わりを被災地と持ったり、単発・短期のボランティアが移動手段や宿が確保できなかった時に、組織力でカバーするなど、市民社会がさらに発展してきていると感じました。

また、今回は義援金だけでなく、活動団体に対する支援金が普及しましたが、この気運を継続させるには、その資金がどのような価値を生み出していったかを返していく必要があると思います。

市民社会の存在が大きくなるにつれ、行政が協働しようとする機会が増えていますが、協働といいつつも対等でない場合が多く見られます。本来行政ができることをやっているうちは対等になれませんので、協働する際には、行政には絶対できないことをする、他がやれることはやらないという位の構えが必要ではないかと思います。災害時でも、緊急時を過ぎたら、自分たちならではの役割とは何かを考える必要があります。

活動の価値を問い直しつづける

単発・短期のボランティアによる活動が増えてくるなか、個々の働きを一連の継続的な活動につなぐコーディネートが重要になります。また、個々のボランティアに、自分が取り組んだことの価値を確認してもらうことも大切です。

そのための「リフレクション」(振り返り)の語り合いの場をつくっていかないとリピーターや継続的なボランティアになってもらえないのではないかと思います。

また、活動を続けている我々自身も、振り返りを行い、自分たちの活動の価値をもっと言語化して、伝えられるようにすることが今、求められていると感じます。

ボランティア・市民活動をしていると、つい自分たちがやっていることは良いことだと、暗黙のうちに思ってしまいがちです。それを多様な角度から振り返って、もしかしたらある人から見たら、自分たちがやっていることは迷惑に思っているかもしれないと思うくらいの見方で検証することが大切です。

一つの価値だけで動かされる社会というものはとても危険です。多様な価値を私たちの市民社会が生み出していることを検証し、その価値を世間に知ってもらう努力が今まさに求められていると感じています。

今、ボランティアを問う ～変えていくべきこと、変えてはいけないこと～

ボランティアは「ユートピア」の担い手となれるか

原田氏：

社会学の分野で「災害ユートピア」と「災害ファシズム」という言葉があります。前者は、被災した大変な中での助け合いや絆を評価するものであり、後者は、被災の混乱の中、管理したがる人間と管理されたがる人間が出てくることを指しています。

東日本大震災でのボランティアの主体性についての話がありましたが、そのときに、コーディネーターが「決められたこと以外しないでください」という管理的なコーディネートをしていた場面もあったのではないでしょうか。リスクの問題もあり、やむを得ない場面もあったのだとは思います。ただ、災害時に限らず社会が縮小し閉塞的・管理的になるなか、ボランティアは「ユートピア」を作り出す存在になるのか、「管理する－管理される」社会の歯車になってしまうのか、まさに社会的な岐路に立っているような状況にあるように感じます。

人を「客体化」しない参加の枠組みづくりを

水谷氏：

先般の制度改正により、一定の寄付者を集める等の条件を満たすと認定NPO法人になれることになりました。しかし、このことを単なる財源の話としか捉えていないNPOが少なくありません。本当に大事なのは、寄付しようとする人の気持ちや思いを引き出すこと、共感の輪をいかに広げるかということです。その際に、人を「客体化」しないことが大切です。先ほど、行政との非対等な関係の話がありましたが、私たちも人を巻き込む過程で相手を「客体化」してしまっていることはないでしょうか。

「リフレクション」とあわせて、その次の活動へのアクションを作り出すのもコーディネーターの大事な役割です。「主体」になってもらう際に大切なのは、その人の気持ちに

サポーターの声

福祉教育は「福祉に関する情報を知る」段階で終わってしまう可能性も多く、その先の地域の状況について「気づく」「関心を持つ」段階まで仕掛けていく重要性を感じました。(新潟県　宮崎さん)

「第21回全国ボランティアフェスティバルみえ」より

寄り添うことです。この10年ほどの市民活動の取り組みは、ややもすればシステムをつくることに重きが置かれていて、一人ひとりを見つめる・寄り添う余裕がなかったのではないかと思います。これからは、人に「主体」になってもらう参加の枠組みを私たちが作っていくことが大事だと思います。

地域のボランティアの大切さを伝える

長谷部氏：

一人ひとりの気持ちに寄り添うお話がありました。ボランティア活動をするまでの気持ちを3段階で表すと、「共感」が最初にあると思います。この人を支えたい、助けたいといった共感です。その次は「理解」です。何をすれば良いのかという行為を理解することです。そして、3つ目の段階は「納得」するということです。ボランティアをすることによって時間を使ったり、お金を使ったり、ケガをしたりするリスクがあることを納得することです。こうした心の動きを意識していただければと思います。

もう一つお伝えしたいことは、地域のボランティア活動の大切さです。東日本大震災の時も、まず近隣の助け合いが行われました。行政による支援や外部からのボランティアによる支援もありますが、それらは近隣の助け合いがあることを前提としています。

今回の東日本大震災で、「災害時は行政や外部のボランティアが支援するもの」とか、「遠くに行ってするのがボランティア」と誤解されることを懸念しています。みなさんからも口を酸っぱくして伝えていただければと思います。

少数者を支える役割を認識する

村上氏：

地域のボランティア活動の大切さのお話が出ましたが、以前、被災地支援を経験したボランティアに、地域へ目を向けてもらう実践をお聞きしたことがあります。いざ災害になったときに助けが必要となる障害者や高齢者と、被災地でボランティア活動を経験した方たちとをつなげるもので、とてもよい取り組みと思います。

最後に、一人の人に目を向けていられるボランティアの特性と役割についてお話したいと思います。

民主主義は多数決であり、人数が多い方に奉仕するのが行政の民主主義です。

むしろ、ボランティアは、一人ひとりの人や少数者を支え、少数の人たち自身が主体となって社会に声をあげたり、役割を担っていくときに、寄り添う存在なのです。

これはどちらが良い悪いではなく、民主主義というシステムの中で相互に補完しあうものであり、ボランティアはその片方を担っているものと認識しておくが大切なのだと思います。

書籍紹介

『福祉教育実践ガイド　地域福祉は福祉教育ではじまり福祉教育でおわる』（平成24年3月）
お問い合わせ先　全国社会福祉協議会全国ボランティア・市民活動振興センター　TEL：03-3581-4656

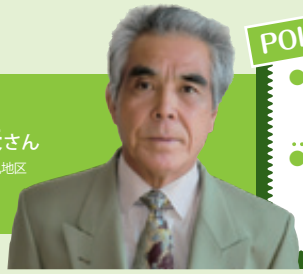
ホントは身近なボランティア

It's also "volunteer"!

送迎サービス

このコーナーは、地域に密着して人々の暮らしを支えている自治会・町内会、地区社協などの活動を紹介します。地域ごとの特徴的な活動やボランティア・市民活動との接点・共通点などに着目していきたいと思います。

第8回 新潟県長岡市四郎丸地区



山崎　邦夫さん
（新潟県長岡市 四郎丸地区福祉会会長）

POINT

- 高齢化に伴って生じた移動や買い物などの困りごとを、住民の中で助け合って解決するしくみを作っている。
- 委員会方式でそれぞれに担当者を選任し負担と責任を分けることで、それぞれのとりくみが活発になっている。

1 住民によるボランティア銀行と送迎サービス

新潟県長岡市四郎丸地区は約3,800世帯、1万人弱が暮らすエリアです。高齢者比率が高く、地域全体で高齢者や心身障害者などを支えています。

長岡市社会福祉協議会は地区福祉会・地区社協の設置を進めてきましたが、四郎丸地区では拠点となる公民館の設置を待ち、平成7年に発足。市内30番目のスタートながらさまざまなアイデアを生かし、今や実績では市内をリードするほどになっています。

「ボランティア銀行」は、現在、協力会員172名、利用会員145名で構成されており、買い物、掃除、雪深い長岡では玄関まわりの「雪かき」、「植木の冬囲い」(昨年度計74回)など地区民の困りごとに献身的な活動を続けています。

利用会員は手助けしてもらった1時間当たり300円を市社協の「ボランティア銀行」に支払い、協力会員は時間300円を1点として積み立て、将来の自分のサポートに使用することができる仕組みです。

また、「送迎サービス」は12名の運転会員が月平均50回の要請に応えています。雪の多い地域にもかかわらず、これまで無事故で、高齢者の"足"として、安全・安心なサービスを無料で提供しています。

2 地域で支え合う福祉会の仕組み

地区民の信頼も厚い福祉会の活動は、紹介した「ボランティア銀行委員会」、高齢者への会食・配食を行う「食事サービス委員会」、民生委員の協力で進める「小地域福祉ネットワーク委員会」、年に3回、"福祉だより"を発行する「広報広聴委員会」、福祉に関する講演会、研修を開催する「研修委員会」(地区独自)の5つの委員会で推進されています。

それぞれに委員長を選任し、10名前後の委員が活動をサポート。社協職員もコーディネートに関与してくれているからこそできる活動です。

3 感謝の言葉を「やりがい」に

協力会員は広報でも呼びかけますが、やはり友人や近隣などへの地元ネットワークからの声掛けが一番効果的です。

サービスを提供する中で、協力会員からも「ボランティアをして気持ちよかった」、「ありがとうと言われるとうれしい」などの声も聞かれます。ボランティアをする人たちがやりがいを感じられるよう、常に心掛けています。

また、研修委員会による人の育成も大切。常に動いている福祉について、実際に活動している委員も学び続けなければなりませんし、地域の人々に福祉の大切さを知ってもらうために啓発的な研修を続けています。

ボランティア銀行の活動風景

書籍紹介

『学校・社協・地域がつながる福祉教育の展開をめざして』(平成21年7月)
お問い合わせ先　全国社会福祉協議会全国ボランティア・市民活動振興センター　TEL:03-3581-4656

突撃訪問！ 隣のコーディネーター

今、社会にはさまざまな分野で、“コーディネーター”と呼ばれる専門職が活躍しています。このコーナーは、毎月さまざまな“コーディネーター”にインタビューし、コーディネートをするうえで大切なこと、プロとしての姿勢などについて尋ねていきます。

今月のコーディネーター
「介護アロマコーディネーター」

日本アロマコーディネーター協会
浅井（あさい）　隆彦（たかひこ）さん

Q どのようなお仕事ですか？

A アロマコーディネーターは、日本アロマコーディネーター協会による所定のカリキュラムと試験を経て認定されるライセンスです。アロマに用いる精油は、正しい知識をもって取り扱わないと大変危険です。アロマを安全に楽しむための知識を身につけていただいています。全国の会員（アロマコーディネーター）数は約24,000人で、その中でアロマを仕事にしている会員は少なく、多くは趣味で教室やサロンを開いています。アロマコーディネーターは、実際にアロマセラピーを行うだけでなく、アロマを通じて人と人との、あるいは、人と社会との橋渡しをする役割を含んでいます。超高齢社会を本格的に迎え、今年度から介護アロマコーディネーターライセンスが新設されました。

Q 介護アロマコーディネーターが誕生した背景を教えてください。

A 香りは私たちの生活の様々な場面と関係があります。ご自宅や教室、お店での芳香浴だけでなく、コンサートやスポーツの会場やでアロマを焚くこともあるんですよ。アロマの効果は、脳の血流量を測定する機械によって可視化され、アロマセラピーは「脳を喜ばす」と言われています。ですから、不安やストレスが多い病院や在宅・施設の介護の現場には香りによる癒しが力になれると思われました。また、多くの会員からは「好きなことを仕事・活動に結び付けたい、身につけた知識を活用して社会貢献したい」との声がありました。アロマオイルの中には、除臭効果や殺菌・抗菌効果が期待されるものがありますので、従来の芳香浴による不安緩和効果だけでなく、インフルエンザ予防や水虫対策、褥瘡の治癒促進や、マッサージによる唾液の分泌促進の効果が期待できます。

Q コーディネートする際に大切にしていることは何ですか？

A 初めは病院・施設のスタッフさんやご家族に、アロマを体験して効果を実感していただき、信頼関係をつくってくようにしています。アロマは介護者にも効果がありますし、そうした上で、ご利用者や患者さん、介護を必要とするご家族の様子を聞き、その方に合ったオイルと使い方を選びます。また、アロマセラピーを一過性のイベントとして終わらせることなく、継続していけるように心がけています。そのために背伸びし過ぎずに「できる人が、できることを、できる限りやる」という（三つの「できる」を称して）3D精神を大切にしています。

帰ってきた！ あるある質問コーナー

このコーナーは、ボランティア・市民活動に関してよくある悩みや問題について、「社協ボラセンナビ」（平成24年3月全社協発行）や、「ボランティア情報」の企画を行っている広報委員から考え方の一例をご紹介します。

「社協ボラセンナビ」より

Q 福祉教育に関する学校からの相談にどう対応したらいいか悩みます。

A 先生の悩み、学校の希望にも耳を傾けながら丁寧なやりとりをしてみましょう。

ポイント1 「同じ“福祉教育”と言っても千差万別！」

「車いすを貸してほしい」「ボラセンに話に来てほしい」など、様々な形で寄せられる福祉教育の相談。それにそのまま応える前に、どうして「車いす」なのか、どうして「ボラセン」なのか、授業は連続授業の一部なのか、単発の体験なのか、先生はその授業で何を達成するのか…。丁寧な聞き取りをしてみましょう。それによって対応は変わってきます。同じゴールを持たなければ目的を達成することはできません。

ポイント2 「本当のニーズに応える引き出しを持つ」

例えば「障害を理解する」という目的の授業で、先生が車いすの乗り方について説明する。…これで授業の目的を達成できるでしょうか？車いすは誰がどんな場面で使うものなのか、当事者の声を聞くという提案をぜひしたいものです。しかし先生は忙しく、こちらからの提案を聞いてもらえる態勢にないことも。先生の大変さに共感してこちらから歩みよりつつ、先生との信頼関係を築きましょう。そして実際に誰かを紹介できるネットワークをコーディネーターが持っているためにも、外部の団体とつながりをつくったり、他部署や他社協に聞いたり、常にアンテナを高く張っておきたいものですね。

ポイント3 「“翻訳”し、“通訳”になる」

「2週間後に200人の点字体験の授業をお願いします」。例えばこんな相談がきたらどうしますか？「無理です」と一蹴せず、どうして今このタイミングでの依頼なのかを確認しましょう。そして、なぜ余裕を持った連絡が必要なのか説明しましょう。講師にも学校の事情を説明し、お互い折り合う気持ちになれるような翻訳作業が必要です。お互いに相手の状況がわからないと、不信感が広がります。目的は「生徒のよりよい学び」という部分で同じはずです。本当に無謀な依頼なら理由を説明して断りましょう。コーディネーターは名通訳でもあることも求められます。福祉教育は学校とつながれる大きなチャンス！一緒にプログラムを作ることを提案するなど、さらなる一歩を踏み出したいものです。

書籍紹介

『社協ボラセン　ナビ』（平成24年3月）
お問い合わせ先　全国社会福祉協議会全国ボランティア・市民活動振興センター　TEL：03-3581-4656

ボランティア情報 2012 NOV. VOL.426
全国社会福祉協議会 全国ボランティア・市民活動振興センター
〒100-8980 東京都千代田区霞が関3-3-2 新霞が関ビル TEL.03-3581-4656 FAX.03-3581-7858
E-mail vc00000@shakyo.or.jp URL http://www.zcwv.net/
発行人●山田秀昭 編集人●野崎吉康 制作●株式会社ジャパンアート 定価●￥105（購読料は会費に含む）

保険の広場

今月の質問

福祉サービス総合補償に関するQ&A

Q1 福祉サービス総合補償の加入対象や補償内容について教えてください。

A1 加入対象は、ホームヘルプサービスやガイドヘルプサービス、配食サービスなど地域福祉サービスを行う団体やグループです。
補償内容は、「傷害」+「賠償」の基本補償とオプションの「感染症」補償があります。

- 「傷害」補償は、活動従事者の活動中のケガの補償です。
  熱中症や細菌性食中毒になった場合や活動場所への往復途上の事故も対象になります。
  また、活動のための学習会や会議なども活動日数に含めれば対象になります。
- 「賠償」補償は、加入団体・グループの賠償責任と活動従事者個人の賠償責任が補償されます。
- 「感染症」補償は、活動中に対象となる感染症に感染し、死亡または4日以上の入院や通院をした場合に補償されます。

Q2 就労支援事業所ですが、利用者の人数を含めて加入すれば補償の対象になりますか？

A2 この制度は、活動従事者および団体を対象とした補償制度であり、利用者を活動従事者に含めることはできません。ただし、活動従事者の過失で利用者にケガをさせた場合は、賠償保険で補償されます。

Q3 前年度の延べ活動従事者数で加入となっていますが、新しく始めるサービスの場合は、どのように加入すればよいのでしょうか？

A3 前年度実績がない場合は、事業計画に基づく見込みの延べ活動従事者数で保険料を算出し加入することになります。

Q4 活動従事者が増えましたが、どのような手続きが必要ですか？

A4 同一サービスで活動従事者が増えた場合は、加入依頼書（写）と活動従事者名簿（追加分）を提出してください。保険料の追加は不要です。

Q5 ホームヘルプ事業に従事しています。利用者から預かったお金を紛失した場合も補償されますか？

A5 活動中に利用者および第三者の財物を紛失したり盗難され、利用者や第三者に損害を与えた場合は補償されます。なお、現金の補償限度額は10万円です。（警察への届出が必要です。）

ボランティア活動保険等についてのお問合せは、株式会社 福祉保険サービスまでどうぞ。

TEL/03-3581-4667 FAX/03-3581-4763 URL http://www.fukushihoken.co.jp/

ボランティア活動保険等の補償制度は、社会福祉協議会およびその構成員・会員ならびに社会福祉協議会が運営するボランティア・市民活動センターなどに登録されているボランティア・ボランティアグループ・団体が加入対象です。

つながって広げ続けよう！

日本YWCA
総幹事
西原（にしはら） 美香子（みかこ）さん

学生時代、社会福祉を専攻。「自分の信条と行動が伴う仕事がしたい」という思いでYWCAに就職。「女性と子どもにとって安心・安全な世界をつくるために、活動する仲間を増やしていきたい」と語る。

YWCAはイギリス発祥の国際NGOで、女性と子どもの安心・安全のために、現在125か国で活動しています。日本では1905年の設立以来、25の地域YWCAと35の学校YWCAを中心にして、若い女性のリーダーシップ養成や国際協力、東日本大震災の被災者支援等の取り組みをしています。被災者支援では、母子のためのセカンドハウスの提供、心のケアのボランティア養成、子どもたちの保養キャンプ、被災した中学生たちの作文の海外への紹介等を行っています。現代社会では、女性の地位は向上してきてはいますが、女性が抱える課題を自ら変革する力はまだ十分とは言い切れません。若い女性のリーダーシップ養成は、シニアとユースが互いに持つ力を生かし合っていくことが必要です。その助けとなるようなプログラムを作っていきたいです。

世界YWCA総会・国際女性サミットに出席した日本YWCAのメンバーたち

INFORMATION

あなたの写した“復興のつぼみ”募集します。

来年度の「ボランティア情報」は今年度に引き続き、表紙で、東日本大震災からの復興の様子を追い続けます。
掲載する写真は全国の皆さまからも募集します。

ポイントは3点だけです。
- ★東日本大震災から、復旧・復興しようとする様子が感じられる写真。
- ★15文字程度で写真のキャッチコピーを付けてください。
- ★写真に関してインタビューさせていただく際のご連絡先を明記してください。

送り先 vc00000@shakyo.or.jp
復興へのパワーがつまった写真、お待ちしております！

事務局だより

この「ボランティア情報」の方針を決めている広報委員会の第2回目があり、来年度にむけての連載企画などについて話し合いました。第一線で活躍されている委員のみなさんから斬新なアイディアや鋭いご指摘などをいただき、来年度の企画は一層磨きがかかったものとなりそうです。中でも、もっともっとボランティアや福祉の幅を広げようという提案には、私自身も錆びついた頭をギューギューと鳴らしながら、とても勉強させていただきました。乞うご期待です！（野川）

この間、「ボランティア情報」のFacebookページ（http://www.facebook.com/zboraj）が「いいね！」100を超えました！他にも「サポーターになりたいです」とお電話があったり、「職場でサポーターの輪を広げたいんですが、いいですか」とメールをいただいたり。毎月の編集作業は大変ですが、皆さんからの声に元気をいただいて、どんどん「ボランティア情報」に愛着がわいてきています。
皆さんも、ぜひ、「ボラジョー」と愛称で呼んでやってください！（柴山）

※本誌掲載の取材対象者の〈所属〉・〈役職〉は取材日当日のものです。

「ボランティア情報」では、みなさんからのご意見や情報を募集しています。

ご意見ご要望等どのようなことでも結構です。企画の参考とさせていただきますので、全国ボランティア・市民活動振興センターまでお知らせください。